

沖永良部島における湧水地調査プロジェクト

萩 原 豪〔鹿児島大学稲盛アカデミー特任講師〕
元 木 理 寿〔常磐大学コミュニティ振興学部助教〕

Research Project on the Springs in Okinoerabu Island

HAGIWARA, Go Wayne〔Senior Assistant Professor, Kagoshima University, Inamori Academy〕

MOTOKI, Masatoshi〔Assistant Professor, College of Community Development, Tokiwa University〕

キーワード：沖永良部島、湧水、ESD（持続可能な開発のための教育）、生活文化、
持続可能な社会

Abstract:

Okinoerabu Island has a rich natural habitat and a unique culture that coexist, and it is very important that we tie these to the next generation. Regarding water resources, Okinoerabu Island is one of the coral upheaval islands and it has been historically difficult for residents to get water resources for their daily lives. There are used to be more than 130 springs using for residential lives, for drinking, cooking, washing clothes and taking bath, etc. Because the local government (China Town and Wadamari Town) developed the infrastructure in the early 1950s, most of the residents stopped using natural springs for their daily use. Now there are only a few records of natural springs in Okinoerabu Island and the residents might forget their history and live culture with the springs. At first, this project tried to make a "spring location map" for basic reference by fieldwork, using GPS information and interviews of the residents. In this project, I also describe a community improvement plan called "Sustainable Society". I would like to utilize ESD and this concrete example, and would like to seek the possibility of the ESD promotion in Okinoerabu Island in near future. This interim report covers the research study through 2011.

Keywords: Okinoerabu Island, spring, ESD (Education for Sustainable Development), life culture, sustainable society

1. はじめに

沖永良部島には豊かな自然と共生してきた独特の文化があり、これらを次世代につなげていくことは非常に重要である。沖永良部島の集落は生活用水、特に飲料水が得られる場

所に分布していることに特徴がある。水は飲料や農作業など人々の生活に欠かせないだけでなく、沖永良部の生活風習とも大きな関わりがあった。

本研究は2010年より、元木理寿・常磐大学コミュニティ振興学部助教と行っている共同プロジェクトである。人・自然・地域・文化などの「つながり」の再生と再構築について、水資源、特に湧水・暗川（クラゴウ）を軸として、地域密着型の環境教育・ESD（持続可能な開発のための教育）を展開していく可能性について検討を行うものである。本稿では2011年度までの研究の中間報告を行う。

2. 沖永良部島の湧水の現状

沖永良部島の湧水や暗川（クラゴウ）で、必ず挙げられるのが、知名町の芦清良地区にあるジッキョヌホー（名水百選）と、住吉地区の住吉クラゴウ（県指定天然記念物）である。これ以外の湧水や暗川（クラゴウ）も多く現存しているものの、その扱いについては和泊町と知名町によって異なっている。

例えば、和泊町ではいくつかの湧水・暗川（クラゴウ）について、和泊町自然環境保護条例によって自然環境保護区に指定している。これには国頭地区のクラゴウ、ティーナガシ、和地区のソーゴウ（竿津川）などが挙げられる。これらの湧水・暗川（クラゴウ）には看板が設置されており、自然環境保護区に指定されていることが分かるようになっている。しかしながら、いずれの看板にもその湧水・暗川（クラゴウ）の名称以外、どのようなものであったかなどの説明は一切記載されておらず、その湧水・暗川（クラゴウ）を取り巻く生活風習がどのようなものであったかを知ることはできない。

他方、知名町の湧水・暗川（クラゴウ）においては、ジッキョヌホーと住吉クラゴウ、そして後述する正名クラゴウ以外、看板などは設置されておらず、その場では名称や由来などを知ることが出来ない状況にある。

このように沖永良部島の湧水や暗川（クラゴウ）は、実際に利用されていた時に比べ、生活の中で湧水や暗川（クラゴウ）に足を運ばなくなった現在では、地域住民の中での位置づけが低くなっていると言えよう。しかしながら、上水道の整備に伴い、既に飲料用水としては使われなくなっている湧水であっても、一部の湧水では今も近隣の住民が野菜などを洗ったり冷やしたり、夏には子どもたちが水遊びをする場所として活用されている。例えば、知名町では黒貫地区のクヌギホー、芦清良地区のイジュヌゴウなどが挙げられる。また、和泊町では谷山地区にあるアシキブは「あしきぶ公園」として整備され、地域住民の憩いの場としてなっている（図1・図2）。しかし、いずれの湧水についてもその名称などを知る術が準備されていないのが現状である。



図1/図2 谷山地区のあしきぶ公園
(2010年12月4日：筆者撮影)

3. 沖永良部島における調査活動の展開

2010年2月に初めて沖永良部島での調査を行った後、2011年末までに計9回の現地調査を行っている。調査の初期段階で、沖永良部島には湧水・暗川（クラゴウ）の地図がないことが明らかになった。確かに農業用水として利用している湧水・暗川（クラゴウ）については、井戸や溜池も含めて、役場の耕地課で記録をしているものの、過去に生活用水として利用していた湧水・暗川（クラゴウ）は対象外であり、その記録は残っていない。また湧水・暗川（クラゴウ）の名前については、えらぶ郷土研究会がこれまでに取り纏めた資料があるが、抜け落ちていた湧水・暗川（クラゴウ）もあることが明らかになっている。そのため、調査活動の中心は湧水および暗川（クラゴウ）の名前と場所の特定作業である。

この特定作業を円滑に進めるため、2011年2月に知名町区長会で、3月に和泊町区長会で、それぞれ調査活動の協力依頼を行った。既に使われなくなった湧水の位置は、荒れ果てた林の中にあることもあり、探し出すことは非常に困難を極めていた。そのため湧水を利用した当時を知る人の協力が必要不可欠であり、区長会への協力を要請するに至った。

調査はえらぶ郷土研究会の湧水・暗川（クラゴウ）リストを基にした聞き取り調査と実地調査を中心としている。特に実地調査では、リストにある湧水・暗川（クラゴウ）の名前と一致させることはもちろんのこと、地図上での場所特定も行っている。この際、カメラに搭載されているGPS機能を活用し、撮影した写真データに位置情報を埋め込んでいる。この写真データを統合し、地図上に表すことにより、地下水の流れが一目で分かるだけでなく、この地図データを応用して新しい湧水マップを作成することの可能性を有している（図3）。また、この湧水マップは将来的にGoogleマップでの公開を検討している。

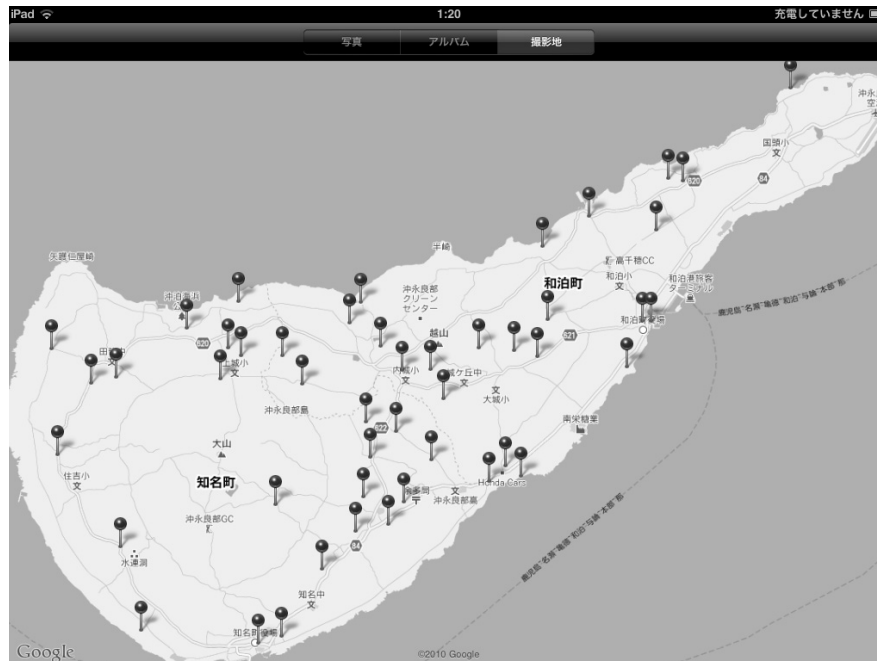


図3 GPSによる位置情報を利用して作成中の湧水マップ (iPad上で表示)

2011年8月2日から4日にかけて、NPO法人サステイナブル・ソリューションズが主催する第3回沖永良部シンポジウム『今残しておきたいこと』において、本調査プロジェクトについて報告をする機会をいただいた(図4)。区長会を除き、沖永良部島の住民に対し、公式に本調査プロジェクトの実施と協力を要請したのはこれが最初である。この報告により多くのシンポジウム参加者が湧水・暗川(クラゴウ)の問題に改めて関心を持ち、これまでに特定が出来ていなかったいくつかの湧水地についての情報提供を受けることができた。



図4 第3回沖永良部シンポジウムでの報告の様子
(2011年8月3日 撮影：元木理寿)

2011年11月18日から20日にかけて、NPO法人日本ウミガメ協議会が主催する第22回日本ウミガメ会議(沖永良部会議)が開催された。共催者である沖永良部島ウミガメ会議

実行委員会のご厚意により、本調査プロジェクトのポスター発表をさせていただいた（図5）。

また会場では、130ヶ所の湧水・暗川（クラゴウ）のうち、これまでの調査で特定することができた80ヶ所をプロットした「沖永良部島湧水マップ（暫定版）」を発表し、プリントしたものを来場者に配布した（図6）。



図5 第20回日本ウミガメ会議におけるポスター発表（2011年11月20日）



図6 第20回日本ウミガメ会議で発表した沖永良部島湧水マップ（暫定版）

4. 今後の展開

沖永良部島には正月元日の朝一番に、決められた湧水から水を汲み、先祖に捧げるという風習がある。一般に「若水取り」と呼ばれる風習であるが、この汲み取った水のことを知名町では「フガヌミジ（若水）」と呼び、和泊町では「ショージ（清水）」と呼んでいる。特に和泊町の各地区においては、若水取りを行う決められた湧水を「ショージゴー」と呼び、他の湧水とは別に扱っている場合がある。沖永良部島における最も位が高いショージゴーは、内城地区にある島内最古のジョージゴーであるイジュンゴーとされている。しかし、港湾整備や土地区画整理事業などにより、これらの湧水が埋め立てられていった地区も多い。特に和泊町の東海岸沿いにあった湧水の多くは、すでに目にすることはできない。これらの湧水の記録を残すことは大きな意義がある。

本研究は将来、沖永良部島において「持続可能な社会」を指向しESDを活用した地域づくりを展開していくための基礎研究として位置づけている。現在、湧水・暗川（クラゴウ）の位置や利用実態を知る世代からの協力を仰ぐため、沖永良部島内で本調査プロジェクトに対する協力要請のポスター・チラシを各所で配布していただいている（図7）。また、本調査プロジェクトは南海日日新聞（2012年1月1日）でも正月特集記事のひとつとして大きく取り上げられた。

現在、小学校における学習活動の中に取り入れていただけるよう、各所に働きかけているところである。2012年度の課題としては、現在配布している暫定版の湧水マップを完成させ、小学校の学習活動で活用できるようなデータを作成することである。湧水・暗川（クラゴウ）を活用したESDの展開について、より詳細な現状分析を行っていき、沖永良部島におけるESDを活用した地域づくりの可能性を探っていきたい。



図7 本調査プロジェクトに対する協力要請のポスター・チラシ

《謝辞》

本研究の調査活動を行うにあたり、多くの方からのご協力をいただいた。沖永良部島での現地調査においては、石田秀輝教授（東北大学大学院環境科学研究科）、林富義志氏（前・知名町役場生涯学習課長）、山下芳也氏（沖永良部ウミガメネットワーク）、前利潔氏（知名町中央公民館・日本島嶼学会理事）西田實氏（知名町中央公民館・図書館館長）、先田光演氏（和泊町歴史民俗資料館館長・えらぶ郷土研究会会長）の各位から情報提供をいただいた。知名町と和泊町の役場・区長会の方々にはフィールドワークにおいて多大な便宜を図っていただいた。そして、特に今回、NPO法人サステイナブル・ソリューションズ、NPO法人日本ウミガメ協議会、沖永良部島ウミガメ会議実行委員会の方々には、沖永良部島において本研究を発表する貴重な機会をご提供いただいた。この研究を遂行するに当たりお世話になったすべての方々に対し、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

《参考文献》

- 沖永良部島100の素顔編集委員会編『沖永良部島100の素顔—もうひとつのガイドブック』東京農業大学出版会、2008年。
- 嘉田由紀子「シャドウ・ウォーター 見えなくなった水の世界」『都市問題研究』43巻8号、1991年、pp.68-81。
- 知名町教育委員会「地域の特性を生かし、豊かな実践的・体験的活動を通じた環境教育の推進」環境教育推進モデル市町村の取り組み（報告）、2003年。
- 萩原豪・元木理寿「鹿児島県・沖永良部島における水資源とエネルギー問題を中心としたESD（持続可能な開発のための教育）の現状と課題」『鹿児島大学稲盛アカデミー 研究紀要』2号、2010年、pp.1-16。
- 元木理寿・萩原豪「鹿児島県沖永良部島における水環境と生活用水利用の現状」『常磐大学コミュニティ振興学部紀要 コミュニティ振興研究』13号、2011年、pp.57-68。

沖永良部島ウミガメネットワーク <http://erabuumigame.ti-da.net/>